講座⑥ 河内の先覚者たち　地域の歴史の中で

第1講義	文筆の先覚者　王仁の後裔氏族と渡来人

古墳時代に渡来した王仁（わに）の子孫たち、続いて百済から渡来した王辰爾の一族たちは、大和政権の文筆担当者として、様々な場面で活躍することとなった。古市古墳群周辺に定住した彼らの果たした役割を考えます。

第2講義	荘園制の成立　八幡信仰と河内源氏三代

清和源氏の中でも、羽曳野市壺井周辺に定住した流れを河内源氏、石川源氏と通称する。そのきっかけとなった源頼信と八幡信仰の結びつきが、頼義・義家と受け継がれて行くことになる。

第3講義	新たな武士の登場　石川源氏から楠木正成へ

元寇後、武士の世界にも大きな変動が生じ、鎌倉幕府に対する不満も高まってゆく。そのような中で、後醍醐天皇の倒幕運動がおこされた。石川源氏はその魁として挙兵するが却って衰退し、新たな楠木氏という武士が南北朝時代の幕を開けてゆく。

第4講義	様々な技芸を持つもの者　久宝寺安井一族・大橋龍慶

近世初頭、この地域から様々な技芸をもつ者があらわれる。久宝寺村の安井一族は、土木工事の技術を持ち、築城や了意川の開発、狭山池の築造などに関わり、一族からは囲碁の名人も輩出した。古室の大橋氏からは秀頼、秀忠などの祐筆をつとめた大橋龍慶が出た。

第5講義	大和川付替えをめぐって　中甚兵衛と万年長十郎

河内平野の水害対策として大和川の付替は一つの悲願であったが、その運動の中心となった中甚兵衛と技術的、行政的敏腕官僚としての万年長十郎の登場はこの工事を一気に進めることになるが、その背景には何があったのだろうか。

第6講義	文芸の発達と好事家たち　日暮重興・阿闍梨覚峰

江戸時代中期以降、庶民生活の向上により様々な文化が発展した。河内の俳諧の祖といわれる藤井寺市小山の日暮重興、近世後期の歴史研究や「好古」学者である駒ヶ谷の阿闍梨覚峰を通じて、地域文化発展の様子をひもとく。